

「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR) の理解のために

鈴木 恵子

0 はじめに

本稿は、言語教育の分野で近年関心をあつめ、日本の英語指導の場でも関心がひろがっている『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) (以下CEFR) を理解するための一考察である。CEFRは欧州で検討が始まり、その影響は世界中に広まりつつあり、日本でも関心が高まっている。教育機関や言語教育にかかわる指導者が、これから導入を検討をする場合には、どのような点に注意したらよいのだろうか。CEFRの基本的な概念を整理し、日本の英語教育に導入する際の留意点を探る。

1 CEFRの概要

1. 1 歴史的な背景

第2次世界大戦後間もない1949年に欧州で、欧州全体の人権の尊重や民主主義の理念の共有と維持をめざして、欧州評議会(Council of Europe)が設立された。その欧州評議会の下部組織に、言語に関する対策を担う言語政策部(Language Policy Division)があり、これまで長年にわたり言語学習のための教授法や評価についての指針を提示してきた。1971年以来検討されてきたCEFRは、30年の年月を経て2001年に欧州評議会の言語政策部より出版された。

CEFRには、複言語主義(plurilingualism)と複文化主義(pluriculturalism)の構想が基本にある。複言語主義とは、ある個人が母語に加え、複数の言語使用をすることを意味する。この概念は、多言語主義(multilingualism)との比較で考えてみるとより明確である。多言語主義は特定の社会のなかで、異種の数カ国語が併存する状態をしめす。つまり、複言語主義はある一人の人物が、自分の置かれた状況に応じて、異なった複数の言語を使用することを示すのに対して、多言語主義はある特定の社会や環境のなかで複数の言語が使用され共存している状況を示している。このように、複言語主義と多言語主義との構想には違いがみられる。

欧州という地域では、異言語や異文化と日常的に接する機会はおおい。従って、他者とのコミュニケーションには、複数の言語の介在が生じる。CEFRの構想を理解するためには、このような欧州の歴史や文化の背景の理解が必要である。

1. 2 CEFRとはなにか

CEFRとはCommon European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessmentというタイトルが示すように、言語の学習や教授、及び評価のために、欧州全域で共通して参照できる指標のことである。CEFRの目的は、言語教育のシラバス、カリキュラム、試験、教科書などに関する質の向上をめざし共通の指標を提供することである。言語をコミュニケーションのために使用するためには、学習者は何を学ぶ必要があるのか、またどのような知識とスキルを修得すればよいかについての提示がある。この参照枠には、レベルごとにその内容の記述があり、学習者は生涯にわたって自分の達成度が計れる到達度指標となっている（Council of Europe, 2001：1, 参照）。

1. 3 CEFRの共通参照レベル（common reference levels）について

教育への活用を考え、広く利用者の関心が集まっているのは、共通参照レベルのリスト（common reference levels）であろう。本稿では、CEFRを英語教育に導入する際に、よく言及される2種類の表を取りあげる。その1つは、総合的な言語能力のレベル分類表（以下の1. 3. 1の項）であり、もう1つは自己評価表（1. 3. 2の項）である。自己評価表は、横軸と縦軸を組み合わせた表（grid）である。横軸に総合的な言語力レベルを、縦軸に5つの言語スキルを配している。

表の各項目は、「言語を使って何ができるか」という記述（Can-do descriptor）で示されている。この言語能力に関する記述文は、「Can-do記述文」や「Can-do ディスクリプタ」、または「Can-doステートメント」などと呼ばれている。（以下Can-do記述文）

1. 3. 1 共通参照レベル：総合的能力レベル表（Common Reference Levels: global scale）

一般的に、総合的な言語能力は、初級、中級、上級といった3レベルに分けることが多い。CEFRでは言語使用者を以下の3つの能力レベルに区分し、それぞれをさらに2つの下位区分にレベル分けをし、合計6段階としている。

基礎段階の言語使用者（Basic User）：A1, A2

自立した言語使用者（Independent User）：B1, B2

熟達した言語使用者（Proficient User）：C1, C2

1. 3. 2 共通参照レベル：自己評価表（Common Reference Levels: self-assessment grid）

自己評価表は上述のA1からC2までの6つの能力段階と、以下の言語スキル別の区分とを組み合わせた表である。（「自己評価表」参照、資料の項に記載）

理解すること (understanding) : 聞くこと (listening) と 読むこと (reading) の 2 区分

話すこと (speaking) : やりとり (interaction) と 表現 (production) の 2 区分

書くこと (writing) : 書くこと (writing)

言語のスキルは伝統的に、「聞く」、「読む」、「話す」、「書く」の 4 技能に区分される。しかし、CEFR では、「話す」をさらに二分し「やりとり」と「表現」に分類している点に注目したい。「やりとり」では、対話者との相互作用が生じるコミュニケーションに重点をおいている。対話や議論では、相手の発話を聞き取り理解し、応答することが求められる。一方「表現」では、事物の説明や論述など、話者自身の発話に重点が置かれている。岡 (2008 : 9) は「やりとり」を 5 番目の言語技能として注目している。CEFR のこの指標により、言語スキルのとらえ方が、これまでの伝統的な 4 技能から今後は 5 技能分類へ推移する可能性もあろう。「話すこと」の内容を二分類にした意義やその影響は大きい。

2 日本の英語教育への影響

2. 1 日本人学習者と英語力：日本向けの CEFR について

CEFR の指標で計ると、日本人の英語学習者の英語力はどのレベルにあてはまるであろうか。投野 (2013 : 123) によれば、日本人の英語学習の英語力は約 8 割が A、約 2 割が B レベルであり、C レベルはほとんどいないであろうという。この調査に基づき、投野らは、日本の英語教育向けに、CEFR に準拠した日本向けバージョン (CEFR-J) の研究と開発をおこない 2013 年に出版された。日本での現状をふまえ、CEFR-J では、Pre-A1 (A1 に到達していないレベル) が追加された。また、A レベルと B レベルの細分化も取り入れられた。その結果、CEFR-J の到達度指標の区分は、最終的に以下の 12 段階のレベル分けになっている。

A レベル Pre-A1, A1.1, A1.2, A1.3, A2.1, A2.2

B レベル B1.1, B1.2, B2.1, B2.2

C レベル C1, C2

CEFR-J は、Pre-A1 の追加をはじめ、下位層の細分化の工夫など、日本の英語教育の現状を反映させ、より適切な自己評価表となっている。CEFR-J 開発の意義は大きく、今後の我が国の英語教育の行方に大きくかかわるだろう。

2. 2 日本における CEFR の関心や英語教育への導入例について

2. 2. 1 CEFR への関心：教育関係 (教育課程、言語教育、英語教育)

CEFR が日本の言語教育関係者の間で、近年関心が高まっていたことは、英語教育関係の雑誌が

特集を組んでいたことから窺える。例えば、2009年の『英語展望』では「CEFRと日本の英語教育」が企画され、2010年の『英語教育』増刊号では特別記事「CEFR—その日本の言語教育へのインパクト」が掲載された。また、大学教育課程に関するセミナーのなかで、CEFRを用いた英語スキル獲得度調査が報告（山田、2012）されるなど、広く関心が高まっている。

2. 2. 2 学校教育での応用

学校教育の現場でCEFRを活用している報告例も増えてきている。なかでも米田ら（2014）による中学生や高校生向けに簡素化した指標に注目したい。注目の理由は3点ある。1点目として、指標が簡潔に用紙1枚にまとまっており、「現在の自分」と「一年後の目標」を確認しやすく作成されている。到達目標を設定しやすい一覧表となっている。2点目として、初級向けに指標の構成に工夫がみられる。初級向けレベルを細分化し、上級レベルは簡素化している。具体的には、Pre-A1、A2、B1の各段階は下位区分され、3つのレベルが設定されている。B2とC1に下位区分はなく1レベルのみであり、上級者対象のC2は省かれており表に記載されていない。3点目として、Can-do記述文に具体的な英文の例を盛り込んだことを挙げたい。たとえば「書くこと」のA2のCan-do記述文は「身の周りのテーマについて、短い文章を書く事ができる（自分自身について I have just eaten dinner. など3～4文くらい）。」となっている。記載された英語例文は、自己評価の際の判断材料として参考になるだろう。

筆者自身は授業（大学）の一部で、CEFRの自己評価リストを活用することを数年来試みてきた¹⁾。手順は、1. 学生は評価リストを読み内容を理解する（原文のCEFR英語版を使用）、2. 自分の現在の英語到達度を自己評価する、3. 卒業までの到達目標を自分できめる、とした。

この活動から観察できた点は、(1)Can-do記述文は、「知識としての英語」から「自分は英語を使用して何ができるか」に意識を向けることに役立った、(2)到達目標をたてることは、学習の動機付けに役立ちそうである、(3)「英語を使用して行動できること」に関して、自己評価と実際の英語能力は必ずしも一致しない、と思われたことである。自分の能力全般に対して過大評価または過小評価する傾向があれば、その傾向がそのまま英語自己評価にも反映される傾向が示唆された。これらの点については、自己評価と実際のスキルとの関連についての実証の試み（投野、2013）をはじめ、今後の実証研究が必要である。

2. 2. 3 語学番組のレベル分けの視点：「学校教育課程」準拠から「Can-do」準拠へ

CEFRの影響は、学校教育関係者に限らず、広く一般の人にも及んでいる。その例としてNHKの語学番組をとりあげたい。NHKの英語語学番組は、例年複数開設されており、それぞれ番組用のテキストが販売されている。英語番組のレベルは初級から上級まであり、テキストの巻末にはレベルの一覧表が記載されている。

その表示方法が、2012年度よりCEFRを活用した一覧に変更された。2012年度のテキストには、「めやす」が新しくなったお知らせと、その趣旨が掲載されている。その説明によれば、国際標準

として注目を集めているCEFRのレベル別で番組を編成し、子どもから大人まで一貫して学べる英語学習プログラムであり、自分のレベルに応じて「英語でできること」を増やすことを目標とする旨が明記されている。(以下はテキスト巻末に記載の「めやす」の抜粋)

2010年度のテキスト「NHK英語講座 ご利用のめやす」レベル表示の例：

- レベル1 主に中学1年程度の文法事項を扱う
- レベル2 主に中学2年程度の文法事項を扱う
- レベル3 主に中学3年程度の文法事項を扱う
- レベル4 主に高校レベル
- レベル5 総合的に高校卒業以上のレベル

2012年度のテキスト「NHK英語番組 ご利用のめやす」レベル表示の例：

- A 0 ごく簡単な表現を聞き取って、名前や年齢をつたえられる
- A 1 日常の簡単な表現を理解して、基本的なやりとりができる
- A 2 日常の基本的表現を理解して、簡単なやりとりができる
- B 1 身近な話題を理解して、意思と理由を簡単に表現できる
- B 2 社会生活上の幅広い話題を理解して、自然な会話ができる
- C 1 複雑な話題を理解して、明確で論理的な表現ができる
- C 2 あらゆる話題を理解して、細かい意味の違いも表現できる

新旧のレベル分け比較のために、長期にわたって放映中の語学番組「ニュースで英会話」をとりあげてみる。この番組は、旧レベル表示の2010年度と新レベル表示の2012年度にも放映されていた。比較してみると、旧表示ではレベル3～レベル5相当とされ「総合的に高校卒業以上のレベル（レベル5）」に分類されている。新表示ではB2の「社会生活上の幅広い話題を理解して、自然な会話ができる」に分類されている。前者の旧レベル分けは、日本の教育システムにそって、どの程度の学校教育課程を経てきたかを基準としている。後者の新レベル分けは、英語を使用して何ができるかを基準としており、学校教育課程との直接の関連はない。

多様な学習者に対応するには、単に履修しただけでなく、習得が確認できる仕組みが求められている（岡、2008：20）。NHKの表記は、「学校教育の履修課程」基準から「Can-do、言語能力中心」基準に視点が移っている。語学番組は、現在学校教育課程で学んでいない多数の人に影響をあたえている。CEFRは、到達度を生涯にわたり計ることができる指標であり、生涯教育にはたす役割は大きい。

3 導入に際して留意しておくこと

上記で述べてきたCEFRの概要をもとに、活用する際に留意する点を以下にまとめる。

(1) 欧州という背景や複合言語主義に関連することについて

先に述べたように、CEFRが生まれた欧州圏は、程度の差こそあれ、一個人は異言語や異文化に日常的に接触する状況にある。この状況を反映して、Can-do記述文には、「仕事」に関連した記述がみられる。例えば、リスニングのB1レベルの項目には「個人や仕事に関する話題 (topics of personal or professional interest)」、リーディングのB1のレベル項目には「仕事に関連したたものを読む (job-related language)」などの記述がある。また、初級レベルであるA1のリスニングの項目には、欧州での日常生活が垣間見られるような「ホテルに宿泊の際に宿泊記録簿に名前や国籍や住所などを記入できる (I can fill in forms with personal details, for example entering my name, nationality and address on a hotel registration form)」といった記述もある。

これらのCan-do 記述文は、日本の多くの学習者にとって、特に低学年の学習者には現実感に乏しい内容で、自己評価の際に判断が難しいのではないか。もし仮に外国にいてホテルで泊るとしたらという仮定の質問になってしまう。CEFRの自己評価表には、このような項目も含まれていることに注意が必要である。

(2) 自己評価について

すでに述べたように、CEFRの表は「言語を使用して、何々ができる」というCan-do記述文で構成されている。例えば、リスニングのC1に「テレビ番組や映画を理解できる」という項目がある。理解できるかできないかの評価は自己判断である。しかし、自分ができると思っていることは、必ずしも実際にできることとイコールではない。すなわち、自己評価と現実の英語力は必ずしも一致しない。今後はこの点に関連した分野の実証研究が望まれる。

(3) 自己評価表の使用と回答者への配慮について

前述のように、CEFRは欧州での言語教育を念頭に作成されたものである。それゆえに、日本の英語教育の現場へ導入する際には注意が必要である。特にレベル別の範疇に関して、レベルA以下の部分の対応が必要である。投野ら(2013)による日本向けに作成されたCEFR-Jは、内容も詳細で具体的になっている。そのため、レベルの自己評価の際には、よりの確に自己判断ができるであろう。一方、詳細な内容は記述量も大部になる。そのため内容を理解する力と集中力、そして判断のための時間がかかり、回答者の負担が大きい。そのまま自己評価として活用するには注意が必要である。自己評価表を指導に用いる際には、使用の目的を明確にして、事前に学習者(回答者)の理解を得るなど、回答者の負担軽減に配慮したい。

4 まとめ

欧州圏で共通して参照できる言語教育の指標をめざして策定された『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(CEFR) は、欧州以外の国々にも影響を及ぼしており、欧州を越えた広範囲で言語教育における指標のひとつになりつつある。CEFRの基本を理解するためには、欧州の文化や複言語主義構想に関する理解が欠かせない。導入に際しては、日本の言語教育の現状や言語環境を考慮にいたした活用が望まれる。教育関係者の関心が高い自己評価表 (Common Reference Levels: self-assessment grid) の活用はいろいろ考えられる。特に、Can-do指標を利用して到達目標を学習者自身が設定することが、学習動機につながることに期待したい。到達度指標は、生涯学習としての言語教育にも役に立つであろう。

言語教育に関して、ひとつの国を越えて共通する普遍性をめざした到達度指標が作成された意義は大きい。それぞれの国で状況に応じた活用をし、そのフィードバックを集約してゆくことが、さらに精緻な指標としてのCEFRの有効度を上げていくだろう。

注

- 1) 2012年度来、「英語科教育法」や「基礎演習」の受講者を対象として、授業で活用してきた。

参考文献

- Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. 吉島茂他 (訳・編) (2004). 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 東京: 朝日出版
- 岡秀夫 (2008) 「英語教育の基準を求めてー日本版CEFRへの取り組み」『英語展望』116号 英語教育協議会
- 英語教育協議会 (編) (2009). 『英語展望』117号 英語教育協議会
- 大修館書店 (2010). 「CEFRーその日本の言語教育へのインパクト」『英語教育』増刊号 Vol.59, No.8
- 投野由起夫 (2010). 「CEFR準拠の日本版英語教育へ到達目標の策定へ」『英語教育』増刊号 Vol.59, No.8 pp.60-63.
- 投野由起夫 (編) (2013). 『英語到達度指標CEFR-Jガイドブック』 東京: 大修館書店
- 中村隆 (2009). 「中学英語でのCan-Do Statementsの応用」『外国語教育学のフロンティア』 東京: 成美堂
- 山田礼子 (2012). 私学リーダーズセミナー講演資料「学士課程教育の質保証にむけて」2012年 10月4日 京都
- 米田佐紀子他 (2014). 「高校生の英語学習に対するポートフォリオの影響の検証」『中部地区英語教育学会紀要』第43号
- 全国英語教育学会 (2014). 『英語教育学の今ー理論と実践の統合ー』 全国英語教育学会
- NHK語学テキスト『入門ビジネス英語』2010年4月号 NHK出版
- NHK語学テキスト『おとなの基礎英語』2012年10月号 NHK出版

資料

CEFR共通参照レベル：自己評価表

Council of Europe, 2001:26-27より

Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment

Common Reference Levels: self-assessment grid

		A1	A2	B1
U N D E R S T A N D I N G	Listening	I can recognise familiar words and very basic phrases concerning myself, my family and immediate concrete surroundings when people speak slowly and clearly.	I can understand phrases and the highest frequency vocabulary related to areas of most immediate personal relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local area, employment). I can catch the main point in short, clear, simple messages and announcements.	I can understand the main points of clear standard speech on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. I can understand the main point of many radio or TV programmes on current affairs or topics of personal or professional interest when the delivery is relatively slow and clear.
	Reading	I can understand familiar names, words and very simple sentences, for example on notices and posters or in catalogues.	I can read very short, simple texts. I can find specific, predictable information in simple everyday material such as advertisements, prospectuses, menus and timetables and I can understand short simple personal letters.	I can understand texts that consist mainly of high frequency everyday or job-related language. I can understand the description of events, feelings and wishes in personal letters.
S P E A K I N G	Spoken Interaction	I can interact in a simple way provided the other person is prepared to repeat or rephrase things at a slower rate of speech and help me formulate what I'm trying to say. I can ask and answer simple questions in areas of immediate need or on very familiar topics.	I can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar topics and activities. I can handle very short social exchanges, even though I can't usually understand enough to keep the conversation going myself.	I can deal with most situations likely to arise whilst travelling in an area where the language is spoken. I can enter unprepared into conversation on topics that are familiar, of personal interest or pertinent to everyday life (e.g. family, hobbies, work, travel and current events).
	Spoken Production	I can use simple phrases and sentences to describe where I live and people I know.	I can use a series of phrases and sentences to describe in simple terms my family and other people, living conditions, my educational background and my present or most recent job.	I can connect phrases in a simple way in order to describe experiences and events, my dreams, hopes and ambitions. I can briefly give reasons and explanations for opinions and plans. I can narrate a story or relate the plot of a book or film and describe my reactions.
W R I T I N G	Writing	I can write a short, simple postcard, for example sending holiday greetings. I can fill in forms with personal details, for example entering my name, nationality and address on a hotel registration form.	I can write short, simple notes and messages relating to matters in areas of immediate need. I can write a very simple personal letter, for example thanking someone for something.	I can write simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. I can write personal letters describing experiences and impressions.

B2	C1	C2
I can understand extended speech and lectures and follow even complex lines of argument provided the topic is reasonably familiar. I can understand most TV news and current affairs programmes. I can understand the majority of films in standard dialect.	I can understand extended speech even when it is not clearly structured and when relationships are only implied and not signalled explicitly. I can understand television programmes and films without too much effort.	I have no difficulty in understanding any kind of spoken language, whether live or broadcast, even when delivered at fast native speed, provided I have some time to get familiar with the accent.
I can read articles and reports concerned with contemporary problems in which the writers adopt particular attitudes or viewpoints. I can understand contemporary literary prose.	I can understand long and complex factual and literary texts, appreciating distinctions of style. I can understand specialised articles and longer technical instructions, even when they do not relate to my field.	I can read with ease virtually all forms of the written language, including abstract, structurally or linguistically complex texts such as manuals, specialised articles and literary works.
I can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible. I can take an active part in discussion in familiar contexts, accounting for and sustaining my views.	I can express myself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. I can use language flexibly and effectively for social and professional purposes. I can formulate ideas and opinions with precision and relate my contribution skilfully to those of other speakers.	I can take part effortlessly in any conversation or discussion and have a good familiarity with idiomatic expressions and colloquialisms. I can express myself fluently and convey finer shades of meaning precisely. If I do have a problem I can backtrack and restructure around the difficulty so smoothly that other people are hardly aware of it.
I can present clear, detailed descriptions on a wide range of subjects related to my field of interest. I can explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.	I can present clear, detailed descriptions of complex subjects integrating sub-themes, developing particular points and rounding off with an appropriate conclusion.	I can present a clear, smoothly flowing description or argument in a style appropriate to the context and with an effective logical structure which helps the recipient to notice and remember significant points.
I can write clear, detailed text on a wide range of subjects related to my interests. I can write an essay or report, passing on information or giving reasons in support of or against a particular point of view. I can write letters highlighting the personal significance of events and experiences.	I can express myself in clear, well-structured text, expressing points of view at some length. I can write about complex subjects in a letter, an essay or a report, underlining what I consider to be the salient issues. I can select style appropriate to the reader in mind.	I can write clear, smoothly flowing text in an appropriate style. I can write complex letters, reports or articles which present a case with an effective logical structure which helps the recipient to notice and remember significant points. I can write summaries and reviews of professional or literary works.

